

真言密教における儀礼

— 序 —

廣 澤 隆 之

今回の総合研究は、昨年度のテーマ「密教と習俗」を踏襲したものである。このようなテーマを設定した理由は、前号で詳しく論じておいた。特に、私たちが思想の核に仏教をすえるとき、その世界観と日常の生活感情とをつなぐ「何か」を問題にすることが基本的な課題であった。

なぜこのような課題が問われなければならないのであろうか。

この問いに対する仏教教理の問題点を前号で論じておいた。しかし、そこでの論述は大上段に構えすぎたこと反省し、ここでは同じ趣旨ではあるが、少しばかり視点を変え述べてみようと思う。それは、私たちの仏教的態度を確認するための視点である。

さて、私たちの仏教的態度の基本はどのようなものであろうか。私たちは、既成仏教教団の枠内で、決定的に死者供養と現世利益を基本とする仏教信仰を生きている。ところが、仏教学研究にもとづく仏教教理を学ぶ場合には、このような死者供養や現世利益はまったく考慮されない。だが、宗団を支えている信仰の力は、死者供養と現世利益であることは決定的である。さまざまに仏教教理が解説されるが、日本において連綿として揺るがない仏教的態度

は、いつもあいまいに残されたままである。この問題に立ち入ることが、智山派の教化推進にとって、不可欠であろう。

もちろん、個々の寺院においてさまざまに教化活動が展開される場合に、このようなことから学問的に考慮する必要はないかもしれない。それは各寺院の地域でのありかた、あるいはそれぞれの僧侶の仏教的態度としてすでに確定していることもあるかもしれない。しかし、智山派が真言宗教団としての態度を確定するためには、各寺院の特性を離れた、もっと総体的な立場が要求されるであろう。

ところが、私たちはこの問題を深く探求してきたであろうか。この反省は、総じて、私たちが真言宗教団としての教化のあり方を求めることに、密接に関係していると思われる。

私たちが真言密教の教えを伝え、広めることが教化の基本であるとしたら、そのためのあらゆる方便が教化活動であることになる。もちろん、ここで方便というのは、大乘仏教の基本テーマである善巧方便（方便善巧 upāyaka-usāyā）をいう。

真言密教の教え、とりわけ密教経典や弘法大師の著作をやさしく解説したり、それをもとにさまざまな布教をすることが、教化のなかでも重視されてきた。ところが、そのことがら、真言密教の根本精神にどのようにかかわるのかを、私たちは今まで深刻に反省してきたとはいえない。たしかに、このような教理の解説を中心にした布教方策は、浄土真宗などの聞法といった伝統的な教化を考慮したものであるかもしれないが、さらには近代になってからのキリスト教の布教伝道に大きく影響されていると思われる。

教理に通じるように教化をすることは、あらゆる人にその教理を公開することであるが、そこには、聞いて知れば分かる、知的に教理に近づくことができるという、知性にたいする暗黙の信頼があった。しかし、この知的に分かる

ことが、宗教の次元では、また大きな躰きの石となることも確かである。その躰きの石を、近代の人間観に対する理性批判ととらえることも可能であろう。それに対して、死者供養と現世利益とは、徹底的に反近代的な構造を持ち続ける。その意義を問わねばならないであろう。

前号でも述べたが、日本の宗教の基層はあくまでも死者供養と現世利益途であった。このことは、日本の仏教の展開についてもいえることである。日本では教理よりも、死者供養や現世利益の宗教儀礼を通じて、生きる意味を見出し、「魂のゆくえ」を配慮することが基層となる宗教風土がある。仏教にかんしても、各宗の教理は人々にそれほど浸透していなくとも、仏教儀礼による死者供養と現世利益の祈りは人々の心に深く浸透している。

この問題を、教化を視点に考えると、いままで私たちはそのことを「伝統行事」といった概念でとらえて、その深層に向かう視点を欠いていたことを反省しなければならぬ。そして、近代的な宗教の布教伝道の方法として、教理を知的に伝えることが大きな目標になるなかで、このような日本の宗教の基層はさらに捉えにくくなっている。そして、さまざまな「伝統行事」を通り一遍の教理で解説することさえまかり通ってしまったている。

私たちは死者供養に際して、さまざまな儀礼を行なうが、そのすべてが仏教教理にもとづいて、さらには真言密教の教理にもとづいて説明できるとは思えない。むしろ、教理によって説明できないことがらを多分に含んだ儀礼の総体を、仏教として捉えているともいえる。

たとえば、死者供養のための位牌が仏壇に祀られるが、その根拠を直接的に仏教教理から引き出すことは困難である（むしろ道教などの先祖供養の儀礼に根拠がある）。そもそも墓を設けることでさえ、どこまで仏教教理にもとづくといえるのか。そしてそこに塔婆を建てることにどれほどの教理的な意味があるのか。

しかし、塔婆にしてみても、墓にモニュメントを設ける心情が、真言密教の「六大縁起」の教理に結びつくこと

で、私たちは「魂のゆくえ」に対する真言密教の態度が示されていると解釈できる。そこには、かつて人々が宗教儀礼にもとづき「魂のゆくえ」に気を配ったことにたいする、真言密教の態度がうかがえる。このように、多くの儀礼は人々の「魂のゆくえ」にかんする不安——哲学的にいえば実存の危機とでもいえるが——をいだく人々に、儀礼を教理にもとづき整合化して示し、その儀礼を通じて不安の解消を祈るところに、仏教の基本的な態度があったといえるよう。

しかし、今日教化のためということで、さまざまな儀礼を通り一遍の教理で解説しようとするとき、かつて日本で展開した仏教が儀礼を教理によって整合化したときのような、「魂のゆくえ」に対する深い洞察があるとは思えない。私たちは「薄められた教え」を振りまくために、儀礼を教理によって説明しようとし、しかもそれが教化の基本であるかのような錯覚に陥っていないだろうか。

たとえば、死者供養に際して私たちは線香を手向けるが、その線香は一本がよいのか三本がよいのかといったことの解答は、決して弘法大師の教理解釈＝教学から直接的に導くことはできないし、また導いてはならないはずである。私たちは、そのように線香を手向ける人々の心のあり方に、真言密教の教理がどのように係わるのかを真剣に問うべきであろう。

仮定の話としてこのようなことがあったとしよう。手向ける線香が三本であり、その三本は身口意の三密を表していると教理的に説明したとしよう。しかし、そのような説明を聞いた人が、三本のうちの一本はご先祖様のため、一本は今日生かされている自分のありがたき、もう一本はこれからの人々の安寧のためであると年寄りから聞かされているとしよう。このような年寄りの「魂のゆくえ」に対する配慮のほうか、はるかに仏教的であると思える。いや、このような説明もなく、ただ無心に線香を手向けることが仏教的であることもあり得る（香などによる供養が大乘仏

教に取り入れられたインドにおける教理については、ここではあえて論じない。問題なのは、祈りの深みに共鳴している教理のあり方であり、それは僧侶一人一人の内面の問題として問われるはずである。

このように、問題の核心は、「魂のゆくえ」を気づかう人々のありかたであり、しかも、そのことにどのように教理的な立場で向かい合っているかということである。しかも、かつて日本ではそのことが深く問われて、さまざまな儀礼が展開した。そのことを、私たちは学び、これからの宗団の教化のあり方を模索すべきではなからうか。このような立場から、智山伝法院の研究は遂行されるべきであり、儀礼にかんするマニュアル作りや、通り一遍の教理解説ではないはずである。

そのために、智山伝法院では、習俗について、そして儀礼について、総合研究の方向を探ってきた。そして、私たちが最も注目するのは、さまざまな習俗や儀礼が一義的に説明できるものではないにしろ、そこには常に「魂のゆくえ」をどのように世界観として位置づけるかの表現が見られることである。その世界観が私たちの文化を形成するべきの基本になっているといえる。

すなわち、宗教と文化の関係が、習俗や儀礼を通じても基本的な問題となっている。仏教にとって、日々を生きる人々が、どのようにその文化を形成しつつ生きているかを見つめ、その文化にどのように係わるべきであるのか、これこそ基本的な課題である。そして、まさしく大乘仏教はこの問題を基本にすえて教理を展開してきたといえる。その深刻で、奥深い教理を、「私たちのことがら」として問うためにも、現在行なわれている仏教儀礼を、先に述べたような視点から考察することこそ、宗団の教化推進のためにも必要であろう。

私たちにとって、教理にもとづいた統一見解として今日の儀礼をひとくくりすることは賢明ではない。むしろさまざまな儀礼が、今日まで連続と伝わってきたなかで、人々がどのうよに「魂のゆくえ」を気づかって、祈りを捧げて

きたかを、今日の視点から問うことこそ、真言密教の現代化に結びつくと思える。

このことは、私たちが想定する宗団の教化推進のあり方にも密接に結びつく。私たちは、先の線香の喩えではないが、ある儀礼を特定の教理によって統一的に解説するよりも、それぞれの儀礼が、それが行なわれる地域の特性（文化状況の特性）によって、何を表現し、どのようにその文化の中で「魂のゆくえ」を求めているかを重視したい。そのことを的確に受けとめ、その儀礼に携わる教師が、真剣にその問題に向かうことが、宗団の教化推進にとって最も肝要であろうと考えられる。

そこで、このような視点に立った各地における教化の核づくりが、今日の宗団にとって必須のことであろう。すなわち、私たちが最も必要としているのは、マニュアルとして教化の指針を提起することではなく、一人一人の智山派の教師が自分の事柄としてさまざまな問題に立ち向かうことである。

おそらく、真言密教の立場では、どのように問題に立ち向かっていっても、そしてどのような問題に対しても、多種多様に答えは導かれるであろう。真言密教では、解答が一元的にならないところに思想の独自性と深さがある。しかし、それをマニュアル化して、教化の指針として一元化してしまうとき、教理は稀薄化されてしまうであろう。

このことは、総じて言えば、真言密教は一点に中心をもつ文化の構造を解体し、脱中心、あるいは中心を多元的にそなえた文化を創出しようとする。それが最も曼荼羅の構想に近いから。

そして、人々の生きる文化は多元的であり、習俗はさまざまにある。それゆえ、宗教儀礼はきわめて多岐にわたって展開している。それらが、その存在のあり方において意義をもつのは、それなりに必然性がある。その総体を密教的な視点から見つめることが必要であろう。

このことは、教化にかんしていうならば、智山伝法院が提起している「地区教化センター構想」と密接な関係があ

る。すなわち、一元的な行政機構の中で中央から教化の指針やスローガンが提示され、それを宗団全体の教化運動にするというのではなく、それぞれの地域に根ざした仏教のあり方を反省して、それを土台にした教化運動が、それぞれの地区を中心に多元的に展開するとき、習俗とみなされている「伝統行事」に、死者供養と現世利益にもとづく宗教の基層を見据えた新しい息吹が吹き込まれるのであろう。

このような構想にも、私たちが総合研究でめざす『密教と儀礼』は結びつくはずであると確信している。私たちの議論をここに公表することで、いままで行われていた仏教儀礼にかんして、それぞれの立場から私たちを批判をしていただき、自らの立場を確定するための材料とされることを、私たちは願ってやまない。

次に、このような立場でなされた総合研究が、各研究室単位で論文として提出されているので、それらを概括的に見ておくことにしたい。

◇教学研究室「密教儀礼のシンボリズム—光明真言をめぐって—」

ここでは、大乘仏教が問題にした教理としての勝義諦と世俗諦との関係を、儀礼の中で再解釈しようとするものである。勝義諦と世俗諦の関係は、仏教の基本的立場とそれぞれの文化状況との関係と翻訳しようという前提に立って、論は進められる。そして、文化状況としての日常性（世俗諦）を勝義諦へ振り向けることが儀礼として成り立つシンボリズムであることを問題にする。そのとき、弘法大師も論じている大乘仏教のキーワードの一つである加持の概念を解釈すると、「魂のゆくえ」は勝義諦に向かうシンボルを生み出すとき、その力を勝義諦から受け取っていると解釈されている。このような解釈が成立するのは、そのような宗教儀礼が成立する根底に、今日の文化人類学の概念でいうアニミズムが認められるからである。アニミズムの世界観でのシンボルとしての土が、光明真言の土砂加持

の儀礼を成り立たせている。そして、光明真言土砂加持の土のシンボリズムが、習俗としての祖霊信仰などと結びついていると考えられる。密教教理はこのように、具体的な習俗と結びつき、はじめて教理を生活の場面に展開できる。

◇現代教学研究室「媒介装置としての儀礼—文化への引入と文化からの脱出—」

先に述べた大乘仏教の教理で言う世俗諦を、ここでは俗なるコスモス、あるいは文化、あるいは日常として捉える。そして、それはそれだけで自立し得ないために、不安定な状態に追い込まれることがしばしばある。それはコスモスにとつての異世界が姿を現わすことによつてである。その端的な例が人間にとつては死である。そこにコスモスと異世界を何らかの方法で関係づけ、コスモスをもういちど安定させようとする欲求が生じる。そのための装置として儀礼、例えば死という異世界とコスモスを関係づけるための葬儀が考えられる。それを二つの世界を結ぶ媒介装置として捉える。この儀礼という媒介装置は、死を日常世界の向こう側の異世界として再確認するために必要な儀礼である。しかも、それを社会的な調査によつて論証した。その結果、仏教的死者儀礼では媒介装置が死者の魂を鎮める機能をもつが、生きている者が日常性を回復する機能をもつにいたっていないことが判明した。

ここには、既成仏教教団としての大きな問題点がある。すなわち、死者の魂を儀礼によつて鎮めた者が、その儀礼とは別の場所で、何らかの生きてゆくための意義づけを行っていると予測できるからである。仏教儀礼が、生きている者の世界を意義づけるものとなっていない点を、これからの既成仏教のあり方として考えてゆかねばならないであらう。

◇事相研究室「密教経軌における儀礼（儀軌）化の構造—陀羅尼密教から瑜伽部密教へ—」

ここでは、日本の宗教的基層を「汎日本的宗教儀礼」として捉え、そこにどのように「真言密教儀礼」がかかわ

り、どのような特質を示しているかを考察している。ここでは密教の基本は成仏と現世利益の二側面をもち、それが不空三蔵によって統合され、弘法大師が継承した正統な密教として成立したという仮説にもとづく。この仮説自体が、真言密教を学ぶ者にとってはきわめて示唆に富むといえる。というのも、密教はいつもきわめて狭い空間に広大な仏の世界を凝縮的にイメーシし、そこでの神秘的合一を果たすことを目的としている。しかもそこで獲得された（と信じられた）超自然の力を拡散するとき社会Ⅱ文化状況に絶大な影響力をもつと信じられている限り、密教は社会性をもつのである。そのことを統一的に教理として儀礼の構造を提示したのが不空三蔵であり、それを日本において適用したのが弘法大師であると考えられる。

そして、日本における宗教の基層である死者供養と現世利益にとって、密教の儀礼の一面である陀羅尼が重視される。しかも、その背景には即身成仏の儀礼が組み込まれている。そのような空海が呈示した真言密教の儀礼の構造を自明のものとしなければ真言密教は現代化されないであろうことを訴える。そして、今日行なわれている各寺院の儀礼を総点検することをもくろむ。

◇教化研究室「教化活動と儀礼」

ここでは儀礼が、そこに参画した人々に与える影響を教化としてとらえる視点から出発する。その視点から、葬儀、地域で行なわれる儀礼、宗派で執行される儀礼の三つを選んで考察する。

葬儀にかんしては、「葬式仏教」という批判的言辭を考慮し、ただ葬式を機械的に執り行なうだけのあり方に疑問を投げかける。そして、葬儀にかんしても、信仰を確立させるものをシステムとして開発すべきであることを目標にする。そのためには、経済効率優先のシステムではなく、人的交流を濃密にしたネットワークづくりが模索されるべきであるとされる。

地域で行なわれる儀礼にかんしては、二つの事例を挙げている。一つは奥羽教区遍照院の火渡り、もう一つは八王子仏教団の灯籠流しである。このうち、火渡りの行事を定着させた過程は、多くの教師にとって貴重な参考となる。また八王子の場合は、その社会的広がりという点で注目される。これらの行事の新しい展開の事例から学べることは、古い閉鎖的な寺院のあり方を打破して、人的あるいは社会的組織とのネットワークづくりを基礎とすべきことであることが提起される。

宗派で執行される儀礼にかんしては、そこに広く社会全般への視点が必要であり、その視点から私たちの基本的な姿勢を反省することが求められるとした。たとえば、「つくしあい」を展開するにしても、人権問題を真剣に問うことが求められる。時代や社会の変化によって、真言宗の儀礼の意義づけが変容する可能性も示唆する。その場合、よりよき方向を目指すために、宗団内のネットワークの緊密性が重要になる。

そこで、さまざまに儀礼を見てゆくと、教化のためにはネットワークづくりが基本となっていることになる。個人あるいは組織が、主体的に参画するネットワークキングが教化のために必須であることが、全体をつらぬく主張である。

以上のように、各研究室はそれぞれの立場から、密教と儀礼の問題を考察してきた。そこに一貫して流れているのは、密教が社会にどのように係わり続けてきたか、そしてこれからもかかわり続けてゆく方向を模索するものである。このテーマの教理的意義については、前号において詳しく述べたとおりである。前号とあわせ読んでいただき、密教にとって重要な儀礼のほんのわずかな側面を垣間みたにすぎない今回の諸論文を参考にして、多くの意見を呈示していただき、智山派の教化推進の活力となることを願ってやまない。